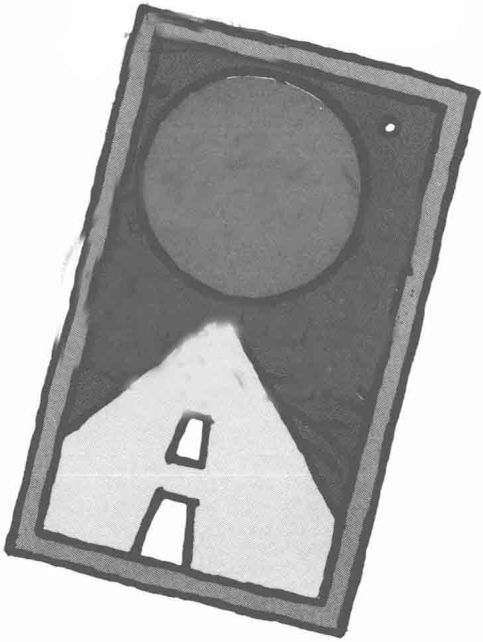
唐獅子株式会社

小林信彦



著者略歴

昭和七年東京日本橋両国生れ。射手座。三十年早稲田大学英文科卒業。三十四年から四年間「ヒッチコック・マガジン」の編集に従事。主な著書に「冬の神話」「ある晴れた午後に」「家の旗」。「衰亡記」で第五十二回直木賞候補。「丘の一族」「家の旗」「八月の視野」で、第七十四回、七十六回、七十七回芥川賞候補。

唐獅子株式会社

昭和五十三年四月一日　第一刷

価　八百八十円

著者　小林信彦

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

電話(〇三)二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©Nobuhiko Kobayashi 1978　Printed in Japan

あとがきに代えて

——喜劇的想像力の練習——

連作「唐獅子株式会社」の第一話（「唐獅子株式会社」）は、はじめは、独立した短篇として発表された。

これは、喜劇的な想像力をどこまでエスカレートさせ得るかという、私なりの試みであった。筋の細部や落ちを前もって作らずに、想像力に連鎖反応をおこさせ、短距離の暴走をさせることによって、結果として一つの物語ができ上ればよい、と考えたのだ。私としては、こうした試みは初めてであった。

私は、この種の想像力を働かせた小説を書くのが好きなのだが、「ナンセンスに過ぎない」とか、「ギャグに過ぎない」とか、一部の編集者に白い眼で見られがちであった。こうした想像力は現実的には〈ギャグ〉の形をとることが多いわけだから、苦心惨憺した挙句の果てに、「ギャグに過ぎない」と言われたのでは、たまったものではない。

幸い、「別冊文藝春秋」では、そうしたことが起らずに、反響を見た上で、続篇を依頼された。第二話（「唐獅子放送協会」）では、坂津という架空都市が設定され、空間的な自由を獲得し得た。

第二話の結末から、ごく自然に、物語は諷刺の領域に踏み込んだ。第三話（「唐獅子生活革命」）、第四話（「唐獅子意識革命」）は、ともに、時代の中のある種の風潮に対する私の怒りを梃子にしている。

ありがたいことに、人物設定と状況そのものがナンセンスなのであるから、私がどんなに怒ったところで、〈怒り〉が生な形で出ることはあり得ない。人物の行動がよりナンセンスになり、グロテスクになるだけである。

念のために書きそえておけば、第三話の中のマザーグース童謡（「だれが駒鳥を殺したか？」）の珍訳は、雑誌発表のさいは二節しかなかったのだが、この単行本には、全十四節を完訳（？）して、収めた。第三話では、ほかにも、かなりの加筆がある。

なお、東京の下町生れの作者にとって、会話のすべてを関西弁で書くのは容易ではなく、エネルギーの半分以上をそちらに吸いとられた。（もっとも、作中の〈私〉＝黒田の言葉は、大阪弁ではなく、呉から広島へと進出して〈広島抗争〉を生んだやくざたち独特の方言が混っている。）インテリの原田の言葉は比較的、共通語（標準語）に近く、ダーク荒巻は興奮すると河内弁がひどくなるように、少しずつ変えてある。

野暮を承知で申せば、こうした小説ほど、エネルギー（体力）と生真面目な平衡感覚を要求されるものは少いだろう、と私は思う。いずれにせよ、この連作で、私は初めて。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

目次

唐獅子株式会社
第一話　唐獅子株式会社　5
第二話　唐獅子放送協会　41
第三話　唐獅子生活革命　85
第四話　唐獅子意識革命　133
雲をつかむ男　177
雲をつかむ男ふたたび　227
JELLIES〈ジェリーズ〉　277
あとがきに代えて

装釘　平野甲賀
画　小林泰彦

唐獅子株式会社

第一話　唐獅子株式会社

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

一

〈唐獅子通信社〉と曇りガラスに金文字で書かれたドアを私は右肩で押すようにしてあけた。

「なんや、われ」

受付の黒い木札を片手でつかみながら、私が見たこともない若僧がわめいた。

「押し売りやったら御門違いやで」

私がひと睨みしただけで若僧は尻餅をついた。年期というか、貫禄というか、かつて、私が細目で一瞥しただけで、ショック死した者が出たあの威力は、まだ、衰えてはいないらしい。

「チャボ、おるか」

われながら痺れるような低音だった。喉が乾いて声が涸れているので、よけい凄味がある。

「チャボ？」

「江崎はおるかときいとるんじゃ」

若僧は感電でもしたように跳び上って、「江崎常務のことだっか？」と念を押した。

常務？　なんや、それ？
「江崎千代松のこっちゃ」と私は言った。「はよ、呼ばんかい」
若僧が駈け出すまでもなく、小柄な中年男の江崎（チャボ）が黒の三つ揃いで姿を現した。
「兄貴……おつとめ、ご苦労さんでした」
チャボは茶坊主の略称である。その渾名にふさわしく叩頭（こうとう）してみせた。
「のう、チャボ」と私は余裕を示して、「わしは刑務所（むしょ）を出る日を間違えたんかいの？」
「そんな……兄貴……」
「五年間、わしはあの門を出る日の光景ばかり、想い浮べていたんよ」私は眼を細めた。「門を出て二、三歩、わしは立ちどまり、ふと空を仰ぐ。空の蒼さが目にしみて、かすかに溜息をつく。……そのとき、控えめな声で『おつとめ、ご苦労さんです』――おまえの役や。さっと煙草がさし出される。わしが一本くわえたところで、シュポッとライターの音。当然、ライターをさし出すのは、おやっさんやな。ライターは金色のカルチェやで。マルマンだとイメージちゃうんよ」
「兄貴が、気ィ悪うしはったのは、当然だす」
チャボはまた頭をさげた。
「わいに責任とれるなら、それなりの覚悟はありま……」
「どないしたんや、おやっさんも、おまえも……」

私はようやく事態がふつうではないらしいのに気づいた。
「さっきから気になっとるんやけど、唐獅子通信社ってなんや？　二階堂組の名、いつから変更になったんや？　わしはきいとらんで」
「それですねん、問題は」
チャボは声を低めた。
「いずれ、おやっさんが正式にいわはる思いまっけど、そのまえに、わいからお話ししといたほうがショック少のうおまっしゃろ。とにかく、応接室へ」

「なんやて？」
私は渋茶を吹き出した。
「須磨組の社内報を作るのを引き受けた？」
「へえ」
「おやっさんがか？」
「へえ。須磨組の大親分の言わはるには、傘下の数ある組長のなかでも、うちのおやっさんは大学を中退しとるインテリやよってに、社内報の編集に向いとるんやないかと……」
「そやけど、あれ、学歴詐称やで」
「わかってまんがな、兄貴」

「わしも、むかし、がたくりかけるために、大会社の社内報ちゅうものを見たことがある。おもろいもんやないで」
「そこですわ。本家親分からは、おもろい社内報をつくれ、須磨組が近代企業に脱皮するためには是非つくらないかんと、そらアきつい命令でしてなあ」
「ふーむ」
私は煙草のけむりを輪に吐いた。極道が近代企業に生れ変るという意味がもうひとつ呑み込めない。
「大親分は本気でそない言うとるんか」
「へえ。……第一号がもうすぐ出来上るとこですが、特集いうかテーマいうか、『麻薬撲滅』が目玉ですわ」
私は腕を組んだ。
「大親分は麻薬がおきらいやったなあ」
「へえ」
「けど、この二階堂組にとっては、いまでも、麻薬が財源の一つとちがうか？」
「重要な財源ですがな」とチャボは力をこめて言った。
「ま、そのへんはタテマエと、うちのおやっさん、割り切ってはるようですけど」
「兄貴」と見知らぬ若者がドアから顔をのぞかせた。

「校正、でけましたか？」
「おんどれ！」
私は反射的に若者の胸ぐらをつかみ、ひきずり込んで、股間を蹴り上げた。
「わしの更生は、わしが考えるわい」
「き、きちがい！」
若者は両手で股を押えて絨緞の上を転げまわった。
「兄貴、誤解や」
チャボがぬかした。「わいは校正部の部長を兼ねとるさかい」
「ほう、いつからそない偉うなったんじゃ。それで迎えにもこられんと……」
「ちゃいまんがな。社内報のカメラマンは、おやっさんの役目。あとは、みんな、このわいの仕事でっせ。今日も、おやっさんは木谷組の舎弟の法事の撮影です。……わいは、さっきも、須磨組の大親分じきじきの電話で、こってり油を絞られて……」
「世の中、変ったの」
私は大きく吐息をした。
「ま、兄貴には、しばらく休んでもろて」
チャボは若者を部屋から追い出しながら言った。
「チャボよ」と私は言った。「みんなが侠道のために働いとるのに、わしひとり、温泉につか

るいう気にはなれんわい。わしも手伝おうじゃないの、仕事を」
「兄貴がでっか……」
チャボは気のすすまぬ様子で私を見た。
「いや、兄貴は白浜あたりで……」
「社内報の名前は？」私はかまわずにきいた。
「ずばり、『唐獅子通信』だす」
「ええのう。……で、表紙は？」
「まあ、兄貴、少しは休んで……」
「気が短いんよ、わし」
私はにやっと笑った。チャボはあわてて、スチルデスクの抽出から、色刷りの紙を持ってきた。
どこか外国の浜辺らしきところに、唐獅子の刺青をした初老の男が褌姿でうしろ向きに立っている。すばらしい刺青である。そして、蒼い空に、勘亭流もどきで〈唐獅子通信〉と真赤な太い文字が浮き出ている。
「どない思いま？」
チャボは心配そうにきいた。
「わしはええと思う。モダンやないか、意外に」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.